

子どもの主体的な活動の展開を指導・援助する保育実践についての考察

北島信子

(桜花学園大学)

はじめに

1998年の幼稚園教育要領は、1989年のそれを基本として改訂された。そして、1989年以降、幼稚園教育が環境を通して行う教育であるということ、遊びをはじめとする、子どもの主体的な活動が重視されるようになったのである。

子どもの主体的な活動を出発点として保育を行う際に、そこでの「子どもの主体的な活動」とはどのようなものであろうか。遊び、制作など、身体を使って展開する活動等が考えられるが、現状では、未だ、教師の保育についての考え方だけでなく、保護者側の要望（たとえば「危ないから」「汚れるから」というような）などにもより、活動が十分に展開できない場合も少なくない。しかしながら、子どもが自らの身体を使って、感覚を鍛え、遊び等の活動を通して世界を広げていくことは、子どもの発達にとって重要な点の一つである。そして、そのような保育を展開するには、担任教諭の指導・援助だけではなく、園全体（管理職も含んだ教職員）の子どもにどのような保育を行っていくのかという考え方も大きく関わってくる。また、園が保護者とどのように関係を取り結び、子どもへの理解を共有していくかについても重要な点であるといえよう。

本研究では、事例に即して、担任教諭だけでなく、園全体で子どもの主体的な活動の展開を指導・援助する保育実践について考察していく。担任教諭、園全体でどのような取り組みがなされ、子どもの主体的な活動の展開を指導・援助しているのか。そして、そのことによって、子どもたち、クラスがどのように変容していったかについても考察していく。

研究方法と対象

総園児数約170名（2003年度：年長2クラス、年中2クラス、年少3クラス）の私立幼稚園で、子どもたちの活動の様子をビデオカメラに撮影し、フ

ールドノートに記述することによる記録を行った。観察内容は、登園後の準備の様子、自由遊び、主活動、降園準備の様子である。とりわけ、年少1クラス、年中1クラスで集中的に観察を行った。そして、毎回の実践後、各担任教諭との討議をし、本時のねらい、子どもの様子についてなどを確認した。観察期間は2003年4月～2004年3月である。観察頻度は月1～3回であった。

結果と考察

事例として、筆者が集中的に観察に入った2クラス（年中、年少でそれぞれ1クラス）の実践を取り上げる。

年少クラスでは、園生活に慣れ、自分で身の回りの準備ができること、そして、言葉や絵などによる表現を中心としながら、仲間づくりを目標に実践がされてきた。その取り組みの一つとして、絵本や紙芝居の読み聞かせを挙げることができる。担任教諭は、それらを行う際に、なるべく子どもが経験したこと（園・家庭において）を扱った内容の教材を選んでいった。そこで、音読によって、言葉と意味をつなぎ、子どもたちに問いかけることを続けてきた。仲間づくりをめざして、子どもたちが自分の気持ちを出せるよう、指導・援助を行ってきた。また、言葉がなかなか出ない子どもについては、個別に言葉掛けを行い続けた。そしてその際に、その子どもが集団の中で友達と関わりながら、言葉を表出できるように、指導・援助してきた。すると12月には、それまでには見られなかった、友達と表情を持ってじゃれる姿などが観察され、少しずつ、他者との関係を形成することができるようになっていったと考えることができる。

年中クラスでは、次のような実践が展開された。このクラスは、年少時から、活動中に、自分にとって面白くないと思うと、保育室から出て行ってしま

う子ども、そして1人の子どもが出ていくとつられて出てしまう子どもが出てしまうなどの、保育を行う際に多々の困難な点があった。担任教諭は、子どもが保育室から飛び出したら、呼びに行き、何度も丁寧に子どもに説明を行い、子どもの気持ちを聞くことを年少時から積み重ねてきた。担任教諭は、園生活において、子どもたちの興味や関心をとらえ、主活動の中で、それらを積極的に取り入れ、その子らしさ、その子のよさをクラスの子どもたちに気づかせるよう働きかけていった。秋以降になると、少しずつ、子どものそのような行動は減少し、落ち着きを見せるようになっていった。そして、年中ということもあり、友達を思いやることができる子どもたちの力によっても、クラスが仲間集団として成長することができた。

そして、年少、年中の教諭の保育実践について共通している点は、保護者とも連絡を取り、園での様子を伝え、家庭でも、継続して保育の目的を持って、子どもを見てもらおうように話し合いを行っていた点にある。また、並行して、教職員、管理職との討議を行うことも繰り返してきた。

担任教諭の保育の実践力もさることながら、実践を支えた要因として、園全体の取り組みの大きさをあげることができる。

園全体で、事実に基づきながら、子どもが育つためにどのような働きかけをしていったらよいかについての討議が日常的に行われていた。学期初めと末には、方針・総括の会議も設け、抽出児もあげ、継続的に討議し、子どもへの指導・援助について理解と考察を園全体で深めていった。

そして、担任教諭との懇談会もあるが、この園では、管理職が日常的に懇談会を設けていることを特長としてあげることができる。そこで、園での子どもの様子、その子の伸ばしていきたいよさなどを伝え、その子にとって、よりよい保育を行っていくために、家庭で取り組んでもらいたいことを討議していく。保護者が保育中に来る場合も多い（子どもの迎えの前などに）、園長と副園長で対応している。転勤等で育児についての相談する人がいない保護者などにとっても、家庭での子どもの様子、園での様

子を話し合うことができる、この懇談によって精神的にも支援することが可能となった。

まとめ

子どもの主体的な活動の展開を指導・援助するために、子どものリズムを尊重し、子どもの興味をとらえる。園のめざす、子どもの主体的な活動とは、単に保育者が設定した環境に子どもをあてはめるというものではなく、子ども自身の興味をとらえ、関わるような環境を設定する。そして、それに子どもたちが関わっていくのである。

取り上げた事例では、それぞれ、担任教諭が子どもに寄り添いながら（気持ち、興味・関心等）丁寧に関わり、子どもの興味・関心を活動に取り入れ、園全体での継続した保育についての討議を行い、そして、保護者とも連携し、それらの結果として、子どもに変容が見られてきた。

子どもの生活は、園だけでなく、家庭にもある。園と家庭で、その子の発達によりよい保育を行えるよう、保護者と懇談することで、具体化している。それが、ここで述べる、保護者との連携である。

変容には、個々の子どもの成長も見られるが、クラス集団としての変化も年齢の1歳大きい年中クラスではより顕著であったこともあげられる。

園では、子どもの発達について、「集団」にこだわって、育ててきた。個を育てることには、集団との関わりも大きく関わっている。事例にあげた教諭は、集団の遊びの中に子どもの興味・関心を取り入れ、個々の子どもの「よさ」を集団の中で評価することで、子どもに自信をあたえている。そして、それは、他の子どもとの関わりもとても大きい。集団の中で、気になる子とともに指導していくことは、その子の発達だけでなく、周りの子どもの成長にも関わってくる。担任教諭だけでなく、園全体での取り組みが子ども、そしてクラス集団の変容に大きく関わっているのである。